

# うれしく思えた日から

ふと思うことがあった。

さしみの下にしかれた大根、シューマイの上のグリーンピース、からあげにそえられたレタス、メインの料理の引き立て役の野菜たち。

色どりをそえるとか、えいようのバランスを整えるとか、そこにはちゃんと意味があるはずなのに、目立たなくてなんだか自分とにているなど。

ぼくは、勉強のできはまあふつう。せいかくは、自分でもわるくない方だと思う。でも、すすんで何かをするのは、ちょっと苦手で、いちおうみんなといっしょに行動するけれど、中心になることはない。

運動も、まあふつうと言いたいところだけど、てつぼうは、何度やってもさか上がりができなかった。

みんなは、らくらくできるのに……。

とびばこは、なんとかとべる。でも、いつもおしりをこする。しっぱいするとますますきんちょうして、次には、ゴツンと音がする。

(いいところなんてひとつもない。)

そう思っていたのだけれど、ある日とつぜん、ぼくがぼくであることをうれしく思える日がやってきた。

それは体育の時間のソフトボール投げのときだった。ボールは三十メートルをこえていた。みんなは、

「うおーっ。」

と声をあげ、

「しょうくん、すごいなあ。いいかたしてるね。」

と言って、かたをたたいていっしょによろこんでくれた。

クラスメイトのけい君が

「ぼくらの野球チームに入りなよ。」

とさそってくれた。第二回目も三十メートルをらくらくこえた。

「あなたは、野球にむいているかもしれないね。」

と、たんになの川村先生も言ってくれた。

これまで気づかなかったけれど、ぼくにもいいところがあったんだ。

その日の夕飯のとき、

「ぼく、野球をやってみたいんだけど。」

とボール投げのことを話しながら、家族に相談してみた。

自分から何かをやりたいなんて言い出したのは始めてだったから、お父さんもお母さんも大さんせいしてくれた。

「あのチームの練習はとてもきびしいみたいよ。でも、がんばって。しょうのいいところを生かしていったら、イチロー選手みたいになれるかも。」

と姉さんも、おうえんしてくれた。

次の土曜日から、ぼくは、練習にさんかした。練習はとてもきびしかった。投げるだけじゃ野球はできない。足こしを強くする走りこみもすぶりもノックも、へとへとになるまでが**ん**ばった。

チームに入って、もう一年になる。あのとき、みんなが言ってくれた「いいかたしてるね。」の言葉が、ぼくの元気のもと、おまじないの言葉になった。そして、いつも出られるとはかぎらないけれど、試合にも出してもらえるようになった。

ベンチにいと、ときどき、さしみの下の大根や、シューマイのグリーンピースや、からあげのレタスを思い出すことがある。

でも、前みたいに、目立たないとは思わない。それどころか、それぞれにいいところを生かしている大事な一人に思えてきた。

ぼくもそうだ。いつの間にか、ぼくは、さか上がりができるようになっていた。

とびばこもらくらくとびこせるようになった。五十メートル走のタイムもあがった。もう一年前のぼくじゃない。おまじないの言葉は、ぼくを元気にして、いいところをたくさん**ん**ばしてくれた。

ぼくのいる野球チームには、ずっと野球を続けて、甲子園に出場した先ぱいがたくさんいる。

ぼくも甲子園へ行けるかもしれない。

もしかしたら、イチロー選手みたいに大リーグでかつやくする日もゆめじゃない。